

鉄砲洲神社詩吟 素読論語解説

(平成 27 年 3 月 13 日)

【二七】子曰く、其の位しゐに在らざれば、其の政まつりごとを謀らず。

今日は、忠久先生にあてはめて解説をします。現在は斯文会の理事長です。その歴史道に詳しい方は、斯文会は東大の前身であると言います。江戸幕府は昌平校という寺小屋の総本山でしたが、そこを官学の総本山にした。その昌平校の伝統をついで東大が生まれました。現在は孔子を奉ずる総本山のような位置付けになっています。忠久先生は、学問に関係するものを主催してきましたので、自分の人生はそちらだという意味をこめて二松学舎元学長、現在は斯文会理事長という言い方をされます。

「其の位に在らざれば」は、忠久先生が感じる「其の位」は斯文会の伝統ある最高ポストに就いていますので、漢詩の学問では日本で一番である。そのポジションに就いている事によって、その学問はナンバーワンという自負を持っている。その上で日々の仕事をしているとっています。その地位にいなければ、その地位にふさわしい仕事を行わないことだ。したがって、そのポジションにある人間がそのポジションにふさわしい仕事をしなければならぬという事です。

自分に置き換えて読めば、ピタリとくる文章だと思って忠久先生の話をしました。

「政を謀らず」とは、その地位にいなければ、その仕事を行わないものだ。言い方を変えると、その地位にいるからこそ、すべき事をすべきであって、その地位にいない人間がいろいろ余計なことを言いなさんと取れます。現代の視点でみます。政治の世界では、その地位にあらざる人達が余計なことを総理大臣や大臣に対して言い過ぎる。大臣の職にある人間でしか分からない問題、内容は沢山あるはずで、そういう事を分かりもしないで、自分勝手なことを言う政治家が多すぎるのではないか、マスコミが多すぎるのではないかと、置き換えて読みとってもよろしいかと思えます。

【二八】曾子曰く、君子は思うこと其の位しゐを出でず。

前の文章と同じ意味になります。君子はそのポジションに就いた場合に思うことは、そのポジション以外のことは考えない。他の人がやっている仕事に余計な口出しをしない。自分に預けられた仕事を一生懸命にやる。これはちょっと形を変えて言っていると、御理解いただければ良いと思えます。